

小川政弘作「日本を愛した神の人 スティーヴン・メカフ物語」

《第4部 よき同労者たちと共に》

アナウンサー 中国での捕虜生活から解放されたスティーヴン・メカフ宣教師は、彼の後半生を、キリストの愛を伝える宣教師としてかつての敵国、日本で、過ごすことになりました。来日した1952年から1990年にイギリスに帰国するまでの38年の間、日本を愛し、日本に半生をささげた伝道の生涯を、彼の口から語っていただきます。では、小川政弘作、ノンフィクション「日本を愛した神の人 スティーヴン・メカフ物語」第4部完結編「よき同労者たちと共に」、どうぞお聴きください。

ナレーション 1975年の秋、私たちが再び青森に帰って数か月後の、翌1976年が明けて間もなく、私たちは OMF 本部から、日本での仕事を切り上げてイギリスへ帰るよ^{へきれき}うにとの指令を受けたのです。それはまさに“青天の霹靂”でした。

エヴリン(三俣京子) あなた、一体どうしたのかしら？ 私たち、どうしたらいいの？

スティーヴ 私にも分からない。でも、何か問題があるとすれば、考えられるのは私たちの5人の子どもたちだ。

ナレーション 私の推測は当たっていました。それは、子どもを持った宣教師が、一度は乗り越えなければならない問題でした。

スティーヴ エヴリン、これには隠された神様のご計画があるに違いない。ともかく一度イギリスに帰って子どもたち会おう。

ナレーション 私たちは、湧き上がる不安を神様に全て委ねて、いつ戻れるかもわからない日本をあとにして、イギリスに向かったのです。けれどもそこで分かったことは、これは子どもたちの教育の問題ではなく、OMF 本部との間の相互の誤解に基づくもので、仔細は省きますが、結局私は OMF を離れることになったのです。待っていたのは当然ながら、イギリスでの職探しでした。いろいろとつてを頼りに探した末、私はロンドンのあるキリスト教団体での仕事を紹介されました。彼らの求人条件には、こうありました。

ディック・ルーカス師(飯島)(フィルター音) はい、こちらの条件は、もちろんクリスチャンであること、日本語が堪能であること、仕事の内容は、ロンドンのクリスチャン・ビジネスマンの多い教会の牧師です。

スティーヴ これだ！ 私にピッタリだよ、エヴリン。よし、早速面接を受けよう。

エヴリン ほんとね。あなた、頑張るって。

ナレーション 私は、ディック・ルーカス氏の面接を受けました。面接は、祈りをもって始まり、

祈りをもって終わり、その間に私は幾つか質問されました。私と会えて感謝しますと彼が祈りを結んだのを聞いて、私は「採用間違いなし」と心に思いました。ところが彼の口から出た言葉は、意外なものでした。

ディック・ルーカス メトカフさん、あなたは、私たちが求めている人ではないようです。神様は、誰か別の人を選んでおられるに違いありません。あなたのおるべき場所は日本です。ここではありません。

ナレーション そう言った彼は、帰り際に、300 ポンドもの、高額の小切手を交通費として渡してくれました。まるで私たち夫婦の財布の中を知っているかのように。

ディック・ルーカス (エコー)あなたのおるべき場所は日本です。ここではありません。

ナレーション 面接からの帰りの汽車の中で、私の耳には、繰り返しこの言葉がこだましていました。私の財布の中を知っていたのは、彼ではなく、神ご自身でした。そして、祈っているうちに、神様の言葉が力強く響いてきました。

神の声(小川) 待ちなさい。ただ待つのだ。私が何をしようとしているのか、分かるまで――。

ナレーション それからほどなくして、私は再び OMF の宣教師として、日本に戻れることになりました。本部と私の間に立って、彼らの誤解を解き、この事を実現させてくれたのは、OMF 国際本部総主事のマイケル・グリフィス牧師でした。彼自身も、シンガポールの本部に戻るまで、かつて日本の宣教師として働いた経験があり、日本宣教には深い理解があったのです。1976 年 11 月、私たちは再び、懐かしい第二のふるさと日本の、青森バイブルセンターのドアをたたくことができました。

ウォレン(東) お帰りなさい、ステパノ先生。

ステイーヴ ただいま、ウォレン。留守中、いろいろとありがとうございました。

ドリーン(中橋文) お帰りなさい、エヴリン。久しぶりの日本はどうですか？

エヴリン ただいま、ドリーン。人々の日本語の響きが懐かしいわ。

ナレーション 私たちの留守中、センターは、このウォレンとドリーンのニュージーランドからの宣教師、ペイン夫妻によって守られていましたが、少ない教会員で苦労も多かったようです。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 1 年半後、私たちは“森の都”と言われる宮城県仙台市に伝道の舞台を移しました。街の真ん中を広瀬川が流れる、緑が美しい東北の大都会でした。仙台教会は、その広瀬川の近くに建ち、バプテスマ＝洗礼を受けた 7 人の男性と 8 人の女性、計 15 人から成る教会でした。正直なことを言うと、東北の人々はほとんどキリスト教には興味を持っておらず、町の中の教会で、会員が 40 人を超えることはまれでした。キリスト教系の大学が 3 つもあるというのが町の自慢でしたが、実際のところは、学生も職員も、ほとんどは仏教徒でした。そんな中でも、何人かの熱心な信徒によって、教会は福音の種をまいていました。

1985年、私たちに、再び報告休暇の時が訪れました。

エヴリン

仙台に来てから、もう8年になるのね。振り返ればあつと言う間だったわ。

スティーヴ

ああ。ほんとに月日のたつのは早いよ。報告休暇も、これで何回目になるんだ？

エヴリン

ええと待って。こんな時のためにメモしてあるのよ。(メモを見る)まあ、7回目だわ。

スティーヴ

そうか。7回目か。私たちもそろそろ引退の年だから、これが最後の休暇になるね。

ナレーション

1年の休暇が終わった後、私たちは仙台には戻らず、宣教データを基にいろいろ研究しながら祈った末、首都東京に隣接する衛星都市で、これからさらに発展が見込まれる町として、千葉県チバケンの浦安市を、最後の宣教地に決めました。かつての小さな漁師町は、1983年4月のディズニーランドのオープンと共に、著しい発展をとげ、今や人口10万人の中都市に変貌していました。もちろんこの新しい町に、なんのつてもなく、それは妻と私二人の熱い祈り、そして神様だけの、ゼロからの開拓伝道のスタートでした。

音楽

(ブリッジ)

浦安で4年間の開拓伝道ののち、1990年、私たちに、日本を去る別れの時がやって来ました。仙台や浦安でも、いろいろな思い出と、私たちの伝道を助けてくれた日本の主にある友たちのエピソードをご紹介しますのですが、もはやスペースが尽きました。

今、日本を去るに当たって、38年間の思い出が、走馬灯のように心の中を駆け巡りますが、長かったようで、過ぎてみれば、まるで昨日のようにも思えます。でも、この日本での年月の間に、私をこの地に遣わされた主のために、何ほどのできたのかと思うと、まだまだなすべきことがあったのではという思いで一杯です。最後に、そんな私たち夫婦をいつも見守り、必要な助けを与えてくださった、親しい同僚や後輩たちに、代わって話してもらうことにしたいと思います。では初めに、ダグ&オルガ・エイブラハムズ宣教師夫妻から。

ダグ ナレーション

(中橋) 軽井沢の日本語学校で、かつては日本の敵であったのに、今は彼らにキリストの福音を伝えるために、多くの宣教師たちが学んでいました。その中の3人は、デイヴィッド・ヘイマン、スティーヴ・メカフ、そして私、ダグ・エイブラハムズでした。学びがひとまず終わると、日本語もまだまだ不十分なのに、私たちは伝道を始めたのです。それはエヴァ・グラスを始め数人の女性宣教師と、我々3人を含む4人の男性宣教師で、北海道のある山の周囲の一つ一つの小さな町で、私たちは伝道集会を持とうと計画しました。最初の集会で、人々はもっと話が聞きたいと言いました。それで私たちは、そこに2人を残して、翌朝、次の町へ出発しました。

私は日本の食べ物はほとんど口に合いませんでしたし、言葉もダメ、畳の上では眠れない…ということで、すっかり疲れ切ってしまいました。そんな中、スティーヴは日本語の地図を勉強していました。そしてこう言いました。

スティーヴン

ダグ、まだ2つの町があるよ。そこにも福音を届けなきゃ。

ダグ

スティーヴ、もういいよ。僕は限界だ。

ダグ ナレーション

すると彼は私に向き直って言いました。

スティーヴン

もしイエスが帰ってこられたら、我々はなんと言えばいいんだい？

ダグ ナレーション

これが、彼が日本を離れる最後まで貫いた伝道姿勢でした。

オルガ

ナレーション(大橋) スティーヴとエヴリン夫妻には、5人の子どもがいます。長男のダニーは、彼がまだよちよち歩きだった時、母エヴリンが、どのように彼を主に導いたかを話してくれました。末っ子のジェームズは、幸いにも中国南西部の父スティーヴの誕生の地を訪れることができました。そこで父の友人だった人の歓迎を受けたそうです。

エヴリンは、最初の子の出産の時に、血液不適合で、今後の出産は危険だとの警告を受けていたので、この子どもたちは彼女の主に対する固い信頼の証しとして、神様にささげられたものでしょう。

スティーヴと私は、同時期に日本に着きました。彼は耳でよく聴き、それを繰り返すことによって日本語を覚えていきました。

日本人①(中尾)

オス！

日本人②(三俣)

オス！

スティーヴン

「オス」？ “オス”ってどういう意味？ 学校では習わなかった。男の人だけが言ってるみたいだなあ。朝の挨拶かな？

オルガ

ナレーション 彼は翌日、日本語の先生に質問しました。

スティーヴン

先生、「オス！」とはどういう意味ですか？

日本語教師(畠山)

スティーヴ、どこで覚えた？

スティーヴン

はい、朝、道を歩いている男の人たちが、お互いに、この言葉を言っています。

日本語教師

それは、会った時の、男性が使う挨拶だ。もともとの「おはようございます」が、縮まって「おはようっす」になり、さらに縮まってそうなったんだ。だが、君たちはまだそんな言葉は覚える必要はない！ まずは標準語だ！

オルガ

ナレーション 軽井沢での9か月間の日本語の学びを終えると、彼は青森県に出向いて、開拓伝道をする可能性について、調査するよう命じられました。彼はあるエピソードを話してくれました。ある日、お役人がやってきて、彼が年に一度、一斉に行う春の大掃除を実行したという証明書をドアにピンで張り付けていきました。彼はそれを見て、こう言ったものです。

スティーヴン

私はあんなものには一切関わらないことにしてるんだ。どうせお寺が主催する偶像礼拝行事の一環だからね。

オルガ ナレーション スティーヴは出しゃばらない紳士で、こちらから喜んで話をしたくなる人、訪ねていくのが楽しみな人でした。

スティーヴン オルガ、そんなこともあったっけね。日本の習慣は、まだまだ勉強不足だった。では次に、ウォレン&ドリーン・ペイン宣教師夫妻にお願いしましょうか。

ウォレン ナレーション(東) メカフ夫妻は、私たちより 6 年ほど前に青森に来て、青森市の東部に小さな群れを開拓しました。それから報告休暇で 1 年間帰国しました。その間に、信者たちはみんな別の教会に移ってしまったので、戻ってくるとまたゼロから開拓を始めなければなりませんでした。

1974 年 4 月、妻のドリーンと私は、最初に日本に着いてから 1 週間後に、メカフ夫妻と初めて会いました。若い宣教師として、ニュージーランドから着いたばかりの私たち夫婦は、任地の札幌に向かう途中、ご夫妻が働いていた青森と、OMF が開拓伝道をしている周辺の町々で数日を過ごして、この北国への旅の途中の、よい休暇になりました。

効果音 (蒸気機関車の到着音)

スティーヴン ウォレン！ ドリーン！ こっちこっち！

ウォレン あ、スティーヴ、エヴリン、初めまして。お会いできてうれしいです！

エヴリン 10時間の汽車の旅、長かったでしょ？

ドリーン もう座席は小さい狭いし、脚も腰も痛くなっちゃって。(笑)

ウォレン それに、東京より寒いですね。まだところどころ雪が残ってる。びっくりですよ。

スティーヴン いやいや、冬はこんなもんじゃないよ。積もるときは高さ7メートル。毎日1、2時間は自宅の前を雪かきだからね。

ウォレン うわ、それじゃ北極並みだ。北海道はもつとでしょ？ 僕たち、務まるかな。(笑)

エヴリン おなかすいたでしょ。夕食にしましょ。日本食、まだでしょ？

ドリーン ええ、早く食べてみたかったんだけど、二人とも初めてだから、ちょっぴり怖くて。(笑)

スティーヴン (店員に)すみません。ではこの天ぷら刺身定食を4人前、お願いします。

店員(三俣) かしこまりました。(奥に)天ぷら刺身定食4人前！

ウォレン カ、カシコマリ…ました？ (驚いて)コ、コマル？ どうして？

エヴリン (笑)大丈夫、困ってるんじゃないの。「分かりました」という意味のとても丁寧な言い方。もう日本語は、敬語がやたら複雑で、覚えるのに100年かかりそう！ (笑)

ドリーン ナレーション 初めての日本食は、なかなかの味でした。刺身は、慣れるまで勇気が要りましたが、“郷に入っては郷に従え”です。まず生活の中心である食べ物に慣れなければ、日本での伝道はできません。慣れると言えば、日本式お風呂もその地で初めての経験をしました。木の浴槽に薪で燃やして湯を沸かす古くからのやり方のもので、浴槽に入る前に、石鹸をよく落として入ることも、家族全員

が入るまで、浴槽のお湯を流してはいけないことも、しっかり覚えなければいけませんでした。

エヴリン 車窓から見て、お国と違うことはあった？

ドリーン なんかも、狭い土地に、おうちがいっぱいって感じね。一面広々とした牧草地で、ところどころに家がぽつんとあるニュージーランドとはまるで違ったわ。でも、見るもの聞くものみんな初めてだから、家々や、建物や、初めて見る桜の花や、いろんな花など、とても興味深かったけど、教会が見つからなかった。

スティーヴン そうなんだよ。私たちも、こちらへ来る車中でまず気づいたのはそれだった。日本は戦争中、キリスト教が禁止され、弾圧されていたこともあって、戦後宣教が再開されても、まだまだ教会が少ないんだ。

ウォレン 頑張らなきゃいけないね。

スティーヴン ああ。いろいろ困難はあるけど、主に遣わされた国だし、“この国の人たちは、どうして少し前まで、あんな戦争をしてたんだろう”と思うくらい、穏やかで優しいんだ。この人たちに、ぜひイエス様の愛を知ってほしいよ。

ウォレン ナレーション そう熱っぽく語るスティーヴは、小柄だけれど、その言葉のとおり、日本人への大きな愛を内に持っている人だということは、初対面で分かりました。今、彼は、この人口30万の青森県最大の町にある^{とお}10の教会に、もう1つ自分が開拓した教会を加えようとしていたのです。ニュージーランドでは、人口 1,000 人に対して1つの教会がありますが、30,000 人に対して1つしかない教会がやるべきことは、たくさんあったらと思うます。

私は札幌に着くと、早速に、日本語学センターで日本語の学びに取り組みました。そして 9 か月後、そろそろ学びが終わる頃になって、私はある大事な決断を迫られることになりました。

OMF 本部長(荒木)ウォレン、学びもあと少しのところまで悪いんだが、今すぐ青森のメカフ先生の教会の跡を引き継いでもらいたいんだ。

ウォレン え？ あの、メカフ先生たちに何があったんですか？

OMF 本部長 ああ、諸般の事情で、中でも一人の息子さんの世話をするために、急にイギリスに帰国することになったので、その間の代理をしてほしいんだ。

ウォレン ナレーション 習い覚えた”青天の霹靂”という言葉は、こういうときに使うのでしょう。私はともかく直接メカフご夫妻から事情を聴くため、単身青森に行きました。2 月のある寒い夜、外には一晩で 50 センチも積もる雪が降りしきる中、私は彼らが手に入れたばかりの建物の 2 階に案内され、そこの広いリビングルームで、膝を交えて語り合いました。

スティーヴン 急な話で、すまないね、ウォレン。でも、このチャンスをどうしても逃したくない。それには、誰か後継者を探さなきゃならない。その時、妻と私が最初に思い浮かんだのは、君だったんだよ。

ウォレン そうでしたか。でも、私なんかには、そんな大任が務まるでしょうか。

エヴリン 確かに大変だと思うわ。でも、これは、ずっと祈り続けた神様からの応えなの。神様は、この 30 万都市の中央部に、願ってもない場所を備えてくださった。2 階建てで、地下に車 5 台が入るガレージがあり、4 台は家主さんの会社の車で、1 台分を宣教団の車に使わしてくれるの。この 2 階には寝室 2 部屋のアパートと、何よりもほら、この広い部屋！

スティーヴン 30 人は収容できる。教会にはおあつらえ向きなんだよ。ビジネスマンの家主さんも、建物を貸す条件は、ここを英会話教室と教会として使うことだったんだ。このチャンスを逃す手はない。ウォレン、ぜひ引き受けてくれないか。

ウォレン ナレーション 彼らの熱意は分かりましたが、私の心の中は不安で一杯でした。建物はそろっても、伝道を支えるクリスチャンはおろか、ここに通う求道者さえ、まだ一人もいないのです。加えてこの町は、生活様式が全て保守的で、先祖崇拜の根強く残っている町でした。そんな中で開拓を始めなければならない私はと言えば、来日してまだ 2 年足らずの、日本語も不自由な宣教師。おまけに妻のドリーンの妊娠が分かったばかりで、その年の 10 月には出産を迎える予定でした。でも、話しているうちに、つらく苦しい思いは、彼らのほうだということに気づきました。せっかく得たチャンスを生かすことができず、まだ十分に心が分からないながらも、神様に全てを任せて従おうとする彼らの姿に、私も最後には、その熱い願いを引き継ぐ決心をしたのでした。

こうして私たち夫婦は、青森に移り、それからの数年間、無我夢中で開拓伝道に励みました。そんなある日—

効果音 (電話の着信音)

ウォレン はい、ウォレンです。

スティーヴン (フィルター音)ウォレン、僕だ、スティーヴだ。

ウォレン スティーヴ！ どうしました？ 今どこです？

スティーヴン (フィルター音)ロンドンだ。いい知らせだ。こちらの問題もなんとか片が付いたので、もうじき、そちらに戻るよ。

ウォレン ほんとですか?! よかった！ 待ってますよ！

ドリーン ナレーション こうして、彼らは再び青森に戻ってきて、私たち夫婦は、報告休暇で帰国するまでの約 9 か月間、共に働くという特権にあずかりました。それを通し、私は再び彼らの失われた魂に対する情熱を見ました。彼らと我々夫婦の 4 人で祈るのはすばらしい体験でしたし、青森周辺の 10 の開拓伝道教会に対する彼らの愛も、はっきり伝わってきました。

ウォレン ナレーション スティーヴは日本の牧師たちからも深く尊敬されており、彼の提言は積極的に受け止められました。神様のご介入を期待しながら、彼が祈る祈りの力、その忍耐、神への信頼などを彼らに証しできるのはすばらしいことでした。

その頃には、彼の語学力は極めて高くなっていて、青森方言を話す能力も、なかなかのものでした。彼は手書きで説教の原稿を書き、それを3つのポイントから自由に話しました。

ドリーン ナレーション 私たち夫婦が1年の休暇ののちニュージーランドから戻ると、彼らは宮城県の仙台に移り、数年後には東京の近くに移って、そのいずれでも、新しい教会を開拓しました。それらの中にも、彼らの祈りに対して、神様が教会の建物や、開拓伝道の礎となる日本人信徒を備えてくださった多くのすばらしい応えを証しすることができます。

ウォレン ナレーション スティーヴは伝道者であり、魂のための働き人であり、説教者でした。彼は、誰もが賞賛する、主のために疲れることを知らずに働いた人でした。過去を振り返って、全てが思ったとおりに行かなかったとしても、彼は信仰を持って前に進むことができました。その彼を支えたのがエヴリンです。彼らは多くの困難に直面しましたが、日本人に福音を届けるという神の召しに、終生従い通しました。

スティーヴン ウォレン、ドリーン、すばらしい証しをありがとう。では最後に、トニー・シュミット、一言お願いするよ。

トニー・シュミット(中尾) 私たちは、1972年の1月に、青森県八戸市で、初めてスティーヴと会いました。彼はその町で、開拓伝道をしていました。彼は私を、一人の若い警察官に紹介してくれましたが、なんと彼はのちに、牧師になったのです！
彼はまた、終戦直後には、おびたしい群衆が、伝道集会に詰めかけたけど、年月がたつにつれ、次第に減っていったという話もしてくれました。
彼は、北海道の小樽で、日本宣教の働きを始めましたが、彼の伝道生活の大半は、青森県で過ごしました。
彼は、気さくで、誠実な人柄で、日本人に対して大きな愛の心を持った人でした。彼は、私たちのような新米の宣教師たちに対して、日本の文化的な面、例えば葬儀の時の挨拶の仕方など、多くの良きアドバイスをしてくれました。
実際に彼と一緒に働く機会はなかったのですが、もっと身近に彼を知ることはできませんでしたが、彼がすばらしい話し手であったことはよく知っています！ 話し好きというのは、宣教師にとっては“たまもの”なんです！

スティーヴン トニー、ありがとう。君にもそのたまものは十分にある。あとは任せたよ。
ナレーション お聴きの皆さん、私は、欠けの多い、体も心も小さな人間です。でも私は日本と日本人を心から愛し、今も祈り続けているということだけは、主の前に胸を張って言えます。それは私の生来の力じゃない。神様が、かつては憎んでいたこの国を心から愛する者に変えてくださったのです。そして、日本と中国の和解のためにも祈り続けています。
最後に一つだけ、どうしても日本の皆さんに言っておきたいことがあります。日

本宣教の38年間、私がいつも考え、心を痛めつつ祈っていたことは、日本人と神様を、そして中国を隔てている目に見えない宣教の“壁”のことでした。日本人は、あの太平洋戦争について、自分から語ることはまずありませんでした。おそらく、戦争を語ることは昭和天皇の責任を追及することになると怖れていたのでしょう。私が個人的には敬愛していた昭和天皇も、敗戦後の日本人の精神的復興のために、そしてかつて侵略した東南アジアの国々のために、できるだけのことはなさいましたが、この戦争の“罪”を公に認めることはないまま崩御されました。けれどもその後も、日本人が戦争について語ることはなかったのです。天皇が原因でなかったとすれば、日本人の“恥”の意識が、戦争を語ることを躊躇^{ちゆうちよ}させているのかもしれませんが。でも理由はなんであれ、“罪”を否定することは神と和解するための妨げになります。戦争の罪を認めることで神との和解が可能になり、旧敵との和解も進むのです。それを本当に可能にしてくださいるのは、あの十字架で、“敵意”という垣根を取り除いてくださった、平和の君、イエス様しかありません。私は日本を去るに当たって、そのことを申し上げ、国へ帰ってからも、そのために祈り続けたいと思います。

アナウンサー スティーヴン・メカフ牧師は、帰国後、南ロンドンのトゥーティンに移り住み、それからの14年間、ロンドン日本人教会の会長を務めました。2014年6月7日、入院先の病院で静かに天に召されました。86歳でした。日本人の友人たちが最後の祈りをささげ、日本語で聖歌を歌いました。病院では、彼の死を確認した看護師が、彼の子どもたちにこう告げました。

看護師(三俣京子) あなたたちのお父様は宣教師でしたね。私は彼の署名入りの本を持っていますよ。一生大切にします。お父様は、天国に旅立たれたのですね。

アナウンサー そうです、彼の魂は、今、天の主イエスのもとで、懐かしい両親や、エリック・リデルや、多くの信仰の友人たち、そして彼が導いた愛する日本人クリスチャンたちと共に、永遠の休息の中にいることでしょう。でも私たちは、彼が約束したように、今も日本のために祈っていてくれると信じています。そして、この“日本を愛した神の人”、スティーヴン・メカフの宣教の働きを、しっかりと引き継いでいかなければいけないと心に深く思うのです。このすばらしい福音の恵みに、一足先にあずかった日本人の一人として――。

(完)